

教科書「モンティの明日への架け橋」の特長と使い方

1. 対象

「モンティの明日への架け橋」は中級後半から上級の日本語学習者を対象にした教科書です。この教材は、日本語のクラスで使用するだけでなく、個別指導 (independent study) や自己学習用に使うことも可能です。内容、アクティビティーは主に大学生を想定して作られましたが、継承語話者の高校生や、社会人の学習者にも使えます。すべての技能においてACTFLのプロフィシエンシーレベルで中級の中(Intermediate Mid)から上級の下(Advanced Low)の習得を目指しています。

2. セマティックユニットのトピックと所要時間

この教科書では東北と東日本大震災に関連するトピックを設定し、オンライン上で入手できる生教材を使い、それをもとに作ったさまざまな学習活動を行うことで、トピックについて深く考え、学習者の知識の構築と日本語総合能力の向上を図ります。

本書には、トピック別のセマティックユニットが9つあります。ユニット1は、東日本大震災に関する基本情報と基本語彙の紹介です。その後、「国際交流：災害から生まれた世界との絆」、「子どもと未来：未来への架け橋」、「コミュニティ：人と人との繋がりと将来への架け橋」、「震災短歌：被災者の心の聲」、「ふるさとに生きる：人と人をつなぐ架け橋」、「職人：東北の伝統工芸の復興と人と人との架け橋となる職人の技」、「エネルギーの未来：フクシマと世界の架け橋」、「自然災害：歴史から学ぶこと」と続きます。

学習するユニットの順番ははじめから順を追っていくのではなく、興味のあるトピック、または内容によって自由に決めることができます。先生方はまずそれぞれのユニットにある「資料」と呼ばれている読み物やビデオ（生教材）に目を通して、ご自分の学生の興味やレベルにあったユニットを選んでください。

各ユニットの所要時間は15時間から18時間程度(週3時間のクラスだと6週間)です。1学期の時間数を考慮して、使用する教材やアクティビティーを選んでください。学生の日本語レベルによって差別化があるユニットもあります。「ミニユニット」と書いているユニットは内容量が少ないので、6時間から8時間程度で終わります。

各ユニットには教材と「先生方へ」という2つのファイルがあります。「先生方へ」には全ての質問の答えはありませんが、期待されている答え、注意が必要なところ、指導を明確にする必要があるところ、答えの引き出し方などのヒントが書かれています。ビデオ教材が使われているユニットには、テロップやスクリプトも入っていますので、ご利用ください。

3. 構成

3.1. 目標

この教科書には、ユニット1とユニット5を除く7つのユニットにそのトピックに関する「エッセンシャルクエスション (EQ)」があり、このEQをもとに、言語と内容を学ぶ目的が書かれています。(ユニット内ではEQを「このユニットで考えること」と呼んでいます。) 各ユニットにある「資料」について学習を進めていくなかで学習者

はEQに対する各自の答えを導き出します。学習者の答えは、正しいか間違っているかというのではなく、学習した内容をもとに学習者が考えて出した結論が答えとなるので、多岐にわたります。また、その答えは、学習が深まるにつれ、変わる可能性もあります。ユニットが終わった時には、学習者は、学習した言語を使って理解した内容について説明し、自分の意見を述べられるようになっていきます。

EQはそれぞれのユニットの最初に書かれています。いくつかの例をあげると、「災害が起こった時に、そして、それが繰り返される時に、人は何を学ぶのだろうか」、「人類にとって最善のエネルギーは何か。」、「人にとってコミュニティとは何か。」、「人々にとってふるさととは何か、また人々はどのようにふるさとと関わって生きていくのか。」、「困難な状況にある子ども達が未来へ向かって歩いていくために必要なことは何か。」、「国際社会において、なぜ国際交流は大切なのか。」、「『職人』とはどういう人たちか。大量生産の時代に職人のもの作りから何が学べるか。」等が取り上げられています。EQに共通しているのは、いずれもインターネットや辞書をみればすぐに答えが出るものではなく、学習者がいろいろ調べたり、クラスで話し合ったりして答えを導き出すという点です。そして、このEQへの答えをもとに、学習者はユニットの最後にプロジェクト、エッセイ、プレゼンテーション等の形で自身の学習をまとめます。

EQに加えて、各ユニットには内容と言語のゴール、及びそれぞれのオブジェクティブがあります。目標とオブジェクティブ達成を測るアセスメントの方法は、各ユニットの「先生方へ」のファイルの、EQの後の表にまとめてあるので、カリキュラムやシラバスを作る時に参考にしてください。

3.2. アセスメント

試験、クイズなどの伝統的な評価方法だけでは、学習者が本当にEQに答えることが出来たのか、実際に学習した言語が使えるのか等の評価はできません。この教科書ではエッセイ、プレゼンテーション、プロジェクト等を使って、代替的な(alternative)アセスメントを実施するようになっており、各ユニットの中にその指示があります。ルーブリックはそれぞれのクラスで学習者のレベルや必要に応じて作ってください。また、クラス開始時の学生の実力を考慮して、区別化をしながら評価してください。後で述べますが、学習のフォーカスはクラスによって違ってきますので、ユニットテストや期末試験はつけてありません。先生方がクラスで行ったことを中心に、テストを作ってください。

3.3. テキスト (資料)

テキストは、全部オンラインの「生教材」で、すべて使用許可を得て掲載されています。テキストは一部省略、訂正(大きな文法や漢字変換の間違い等)、またはごく一部で簡略化したものもありますが、ほとんどが生のままで学習者に届けられるようになっています。

母語話者のために書かれたテキストは学習者には難しすぎると思われ、敬遠されがちですが、特に上級の学習者はクラス終了後は自分の力で身の回りにある物を読む(聞く/見る)こととなります。「学習者の知っている範囲+α」の限られた文法や語彙、漢字だけで構成されている教師の書き下ろしのテキストを使ったり、教師による解説や、

単語リスト、漢字リスト等に頼ったりしていると、学習者が自力で考えながら読んで（聞いて/見て）いくという力や習慣がつかず、将来自分で読む（聞く/見る）ことが難しくなります。また、いつまでたっても辞書を片手に、知らない語彙や漢字はすべて調べて、一字一句確認しないと理解できないという信念をもつ事態になりかねません。

この教科書では、母語話者のために書かれた読み物や作られたビデオを、「足場作り」(scaffolding) をしながら、ステップを踏んで読む（聞く/見る）ことにより、将来は学習者が自分で考えながら内容を理解していけるストラテジーを身につけることを第一に考えて作成しました。

3.4. 各ユニットの構成と足場作り (scaffolding)

この教科書は足場作りに重点をおいて構成されています。まずユニットの最初に「はじめに」があり、そこで各ユニットのトピックに関連のあるアクティビティをいくつか行います。その後「資料」（読み物、ビデオ）のパートが2つか、3つあり、最後に学習のまとめとして「最後に」があります。

「資料」はそれぞれ「読む/見る前に」「読んで/見てみよう」「読んだ/見た後で」に分かれており、また、「読んで/見てみよう」は「一度ざっと読んで/見てください」に続いて「今度は詳しく読んで/見てみましょう」の二部に分かれています。どのステージでも足場作りの学習活動がふんだんに取り入れられています。

「自分の力+ α 」以上の難度の高い読み物を見せ、「さあ、読みましょう」と音読をし、細かい内容についての質問をし、一つ一つの文を構文の上からだけ分析させたり、いきなりビデオを見せ、逐次止めて表面的な内容理解の確認だけに終わったりするような授業が見られます。このような学習方法は、面白くないだけではなく、本当に必要な読む（聞く/見る）力がつくこともなく、またいつまでたっても一人で読む（聞く/見る）力がつきません。したがって、この教科書では、まずどのユニットも「読む（聞く/見る）前に」のところで足場作りのための前作業を行います。これらが終わると、背景知識の活性化ができ、内容もある程度はすでに分かり、未習の語彙も辞書を引くことなく読む（聞く/見る）準備ができています。ここまでの準備を終えてはじめて本作業（読む/聞く/見る）に入ります。

しかしながら、いくら前作業が多くても、それだけで問題なく生教材が理解できるわけではないので、効果的な読み方を指導することが必要になります。例えば、学習者はまず一度ざっと読んで（聞いて/見て）大体の内容を理解したことをチェックします。これが本作業における最初の足場作りです。そして、その後で段落ごとに詳しく理解していきます。その時にも、ヒントを出したり、選択肢を与えたり、文の穴埋めをしたり、というような数々の足場作りを行います。一見するとまるでクイズのようだと思われるかもしれませんが、これは一つずつステップを踏んで、学習ストラテジーを身につけてもらうための足場作りをしているのです。

この教科書にあるアクティビティは教室活動としても宿題としても使うことができますが、「はじめに」や「読む/見る前に」にあるトピック導入の部分は教室で行い、学習者が持っている内容に関する予備知識や言語知識を把握してから、その後の指導方法を調整してください。また、一度ざっと見て質問に答えるアクティビティも教室活動として行ってください。その際、一字一句解読していく読み方をさせず、必要な情報

だけをつかむ読みのストラテジーをつけていきます。ビデオ教材の場合も同じで、大切な情報をつかむように指導してください。

授業時間が少ない場合は使う教材を限定する、宿題として使う、また、クラスの人数が多い場合にはペアワークやグループワークを増やすなど工夫をしてください。学習者が「このユニットで考えること」の答えを見つけられれば、すべてのアクティビティーをする必要はありません。

3.5. 語彙、漢字、文法

テキストを読む（聞く/見る）前に漢字や語彙のリストを学習者に与えて暗記してもらおうという方法は、コンテキストなくしての丸暗記になるので頭に残りませんし、場合によっては使い方や意味を理解することなく間違えて覚えてしまうかもしれません。

「グロサリー」と言われる、何十とある語彙/漢字リストを見ながら読むという方法は勿論、論外です。

この教科書では、前作業の中に漢字や語彙をコンテキストの中で練習するアクティビティーを数多く取り入れてあります。漢字の組み合わせから意味を推測する練習、読み方を推測する練習、新出語彙が含まれた文の内容から意味を推測する練習等がたくさん入っています。文法の扱いも同様で、例文から意味や使い方を考えて自分でも使ってみるような練習もあります。

漢字は読みの中で意味を推測することを第一の目的としていますので、最初に遭遇した時には読み方が分からない漢字があるかもしれません。もしその漢字を使った語彙が必要なら、読み方は後で調べて覚えてもいいのですが、将来使う可能性が低いものや、現時点で大切ではないと判断されるものは、内容が分かった時点でそれ以上に何かする必要はありません。また、漢字を書く練習は最小限に押さえてあります。一つの漢字の書き方を覚える時間で三つの読み方とその漢字の語彙の意味が覚えられるであろうとの考えからです。

「読んで/見てみよう」の最後の部分は漢字、語彙、文法、表現等の練習になっています。「読んだ/見た後で」のセクションには学習した漢字や語彙を使用してのアクティビティーが含まれています。

最後に、中上級になると、学習者間の日本語力の差がとても大きくなり、その中でも一番差があるのが漢字力かもしれません。漢字力の差が特に顕著なクラスでは、最後のまとめ等で、教師がレベルにあった漢字の選択をしたりアクティビティーを作ったりする必要があります。

3.6. 書くアクティビティーについて

どのユニットにも学習した内容について意見や、まとめ、EQの答え、エッセイ等を書くアクティビティーが複数含まれています。特に数百字以上の長いものは提出させて教師が読むことになりますが、その際には、初めに文法や漢字の間違いを一つずつ直していくのではなく、まず内容と構成に注目し、その後で言語面を見ていくようにすると学生の理解度が分かります。そして、フィードバックを与えた上で何度か書き直しをさせてから最終原稿を提出させ、そこまでに至ったプロセスとともに評価するとよいでしょう。

4. その他の注意点

オンライン上の教材を使用しているため、ユニットをダウンロードしてクラスで使う時にリンクがなくなっている、あるいはURLが変わっている可能性があります。教材を学習者に配る前に必ずリンクを確認してください。また、最初はリンクがあっても、学期中になくなることもありうるので、学期末まで必要だと思われるものは、自分のデスクトップにダウンロードしてバックアップを作っておくことをお勧めします。

最後になりますが、ダウンロードしたユニットをBlackboardやMoodleなど所属の大学のサイトに入れる場合は、著作権の所在を明示するために、必ず下記のURLを入れてください。<https://scholarworks.alaska.edu/handle/11122/4144>

カリフォルニア大学サンディエゴ校 牛田英子
カリフォルニア州立大学ロングビーチ校 片岡裕子